

ジュエルペットていん
くる★さどにす

Dr. クロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

はるか昔、とある魔法が宝石の獣が存在する世界から人の世界へと逃げ込んだ。

その後、しばらくしてその魔法はとある1つの命と一体化し、人生を歩む。

時が流れ、少女が1匹のジュエルペットと出会った事で物語は始まる。

ジュエルペットにオリキャラを入れた二次創作です。

目次

第一話く不思議な2人と1匹のウサギで どつきどつき!く	1
第二話く黒兎とジュエルランドにどつき どつき!く	21
第三話くジュエルランドの出会いにドッ キドキ!く	38
第四話く夢を追い駆けてドツキドキ!!く	57

第一話く不思議な2人と1匹のウサギでどつきどつき！く

それは不思議な不思議な出会い…

幼き頃、ふと気付いた時から彼女は自分の中にいた。

寂しい時や悲しい時に慰めてくれたり、悪い事をした時は説教をしてくれて、嬉しい時は一緒に喜んでくれた。

そんな彼女と長く時を過ごし、桜あかりは6年生になった始業式の日で新たな出会いを果たす事で物語は始まる。

☆

鼻歌を歌いながらあかりは制服の胸リボンを整えていた。

『ラッキーカラーは赤、それでは続いて、今日のアンラッキー星座は…蟹座です』

あかり「ええ、嘘ー…」

後ろで付けていたテレビから放映された星占いのにあかりは慌ててテレビを見る。

『不幸な出会いが思いも見かけない運命に導くかも』

あかり「やだー不幸な出会いって…今日は始業式でクラス替えなのに…」

??? 『朝から嫌なの見ちまったなあかり』

結果に不満げになるあかりの頭に励ます声が響く。

??? 『まあ占いつてのは当たるも八卦当たらぬも八卦って言うじゃねえか。あまり気にしないほうがいいぞ』

あかり「うん：ありがとう、アンリ」

どういたしましてと頭に響いた声はお礼にそう返す。

アンリ、それがあかりの中にいる存在だ。

幼き頃に声を聞いてからあかりを支えている存在だ。

家族にも知られていて、あかりともども可愛がられている。

そんなあかりに姉であるモニカが話しかける。

モニカ「あかり、アンリ、先に行くね」

あかり「あ、行ってらっしゃいお姉ちゃん」

アンリ『いつてらー』

出て行くモニカを見送ってからあかりもごはんを食べてから自分の通う学校へと向かう。

あかり「不幸な出会いか：あー神様、クラス替えてみっちゃんたちと同じクラスになりますように！」

アンリ『それにさっきの占いつて良く外れるから当たらないだろ……多分』

学校に向かうバスへと向けて走るあかりにアンリはそう返す。

あかり「そ、そうだよね！当たらないよねきつと！」

それにあかりもうんうんと納得してる間にバス停に着く。

まだ目的のバスが来てないので待つことにして2人で談話を始める。

あかり「……あれ？」

アンリ『どうしたあか……!?』

他愛もなくアンリと話していたあかりはふと海の方を見て、その行動にアンリが聞こうとしてあかりの目を通して見えたのに驚く。

海からピンク色の輝く光が海岸に向けて進んでいたのだ。

あかり「綺麗……」

アンリ『（この感じ……来るかもしれないと思ってたがまさか本当に来たのか……!）』

光を近くで見ようと海岸に降りたあかりとは裏腹にアンリは警戒していた。

すると光の輝きが強まり、柱の様なのが出来る。

その瞬間、アンリを除いて時が止まる感覚が起きる。

アンリ『（あれは……ジュエルペット……!）』

光の柱から飛び出そうとしてるのにアンリは驚いている間に再び時が動き出し、あかりは尻もちをついてしまう。

あかり「あ……あれ？」

何が起きたのか戸惑うあかりだったが自分の前に立つ小さい生物に気づく。

その生物は白い毛皮に赤いアクセサリーを見に付けた兎であった。

ただ、2本足で立っているのが普通の兎ではない事をあかり達に認識させた。

あかり「う、うさぎ……？」

アンリ「まさかジュエルペットと出会うなんて……」

戸惑うあかりの中でアンリは困った様に唸っていると兎は目を輝かせた後に嬉しそうに飛び上がって腕や足をバタバタさせた後に着地してから話そうとしているのか戸惑うあかりの様子に気づいて何か飴玉の様なのが入ったのを取り出すと1粒食べる。

兎「あ、あー！あ、い、う、え」

あかり「(な、なにあの飴みたいなのは……)」

と言うか兎が食べて大丈夫なのとあかりが思っていると……

兎「うわー！素敵素敵！レアレアの子って！おめめキラキラで髪もフワフワで……」

すると先ほどとは一転、言葉を流暢に話しますと戸惑うあかりに抱き着く。

あかり「ひゃあ!？」

アンリ「(あかりの奴、色々と戸惑っているな……ん?)」

兎「ほっぺはぶにぶにのぶよぶよ」

アンリ『…遅刻決定だな』

慌ててバス停に戻るが動き出してるバスの後ろを見てああああと落ち込むあかりにアンリはドンマイと返す。

あかり「うう、あれを逃したらもう遅刻決定だよ…」

ルビー「学校遅刻? 任せて!」

嘆くあかりにいつの間にか傍に来ていたルビーがそう言う。

あかり「え?」

アンリ「(嫌な予感がするな…)」

先ほどのルビーの自己紹介でアンリはそう思っている…

ルビー「ティンクルティンクルマジカルチャーム! あかりちゃん、空を飛べ〜!」

右手を輝かせてそう唱えるとルビーの右手から放出された光りがあかりに降り注ぐ。

あかり「え、え、ええええ!」

いきなりの事に戸惑っているとかばんも浮き出す。

その様子にやったやったー大成功! とルビーがはしゃぐが…

あかり「かばんだけ飛んでも意味ないよ!」

アンリ「(しかも方向逆だし…)」

失敗と言うのを指摘してから飛んで行くカバンを慌てて追いかける。

これではまずいと考えたアンリは…

アンリ『あかり、変われ！オレが捕まえる！』

あかり「う、うん！」

その言葉と共にあかりは目を瞑る。

目を開くと色が真紅に変わり、すこしツリ目になると先ほどよりスピードを上げてカ

バンをキャッチする。

アンリ「よし、捕まえた……」

ルビー「あかりちゃん？」

ふうと息を吐いた後に不思議そうに見ているルビーを見てから仕方ないため息を

吐いてからルビーを抱えて走る。

しばらくしてあかりが通うウインストン学園に辿り着く。

アンリ『なんとか一時間目が始まる前に辿り着いたな……』

あかり『ありがとうアンリ』

ふうと息を吐いてからお礼を言うあかりに良いよと返してから目を瞑る。

再び目を開くと緑色に戻っていた。

ルビー「不思議不思議！あかりちゃん、目の色が変わるんだね」

あかり「え、ええつとそれは……」

興味深そうに見えるルビーにあかりは困ったが時間を見てすぐさまいけないと考えてルビーを降ろし、どこかに隠れていてと言つてから学園内に入る。

アンリ『危なかったな…危うくバレるところだったぜ』

あかり『私はアンリの事を話しても大丈夫だと思っただけど…』

チラツと言われた通り隠れ始めるルビーを見てそう返すあかりにアンリは困った様な口調で帰して来る。

アンリ『いや、その、オレがルビーの教師になる人とかに知られたらあかりと離れる可能性あるからさ…』

あかり『え、そうなの!?!』

出て来た言葉にあかりは驚く。

それと同時にいやだと思った。

あかりにとってアンリは自分を支えてくれた大切な存在で離れたくないのだ。

それなら仕方ないと考えた後にクラス発表の紙が張られたのに気づく。

あかり「えーとあった。私6年2組か…え、嘘!?!」

アンリ『どうしたんだあかり?』

すつとんきよんな声をあげるあかりにアンリは聞く。

あかり「みつちゃんもかなもゆうこも誰も居ないよ!?!」

アンリ『あー…見事に分かれちゃったか…』

5年生までの親友達とクラスが分かれてしまった事に落ち込むあかりにドンマイとアンリが励ますのを聞きながらあかりは目的の教室へと足を運ぶ。

あかり「あ、あれは……!」

落ち込んでいたあかりだったが教室内を覗いてその中の一人に目を輝かせる。

その人物は神内 祐馬、あかりの憧れている男子生徒である。

あかり「佑馬くんと同じクラスなんだ……!」

アンリ『良かったなあかり。好きな佑馬と同じクラスなれて』

くすくす笑って揶揄うアンリにち、違うよとあかりは顔を真っ赤にする。

あかり『ゆゆゆ、佑馬くんは憧れであってそうじゃないよ……!』

アンリ『えーホントか?』

ニヤニヤしてるだろうアンリのに違うたらしくとあかりは腕をブンブンさせる。

???「あら、あなたは……桜あかりさん?」

後ろからの声に振り返ると女性がいて、担任の先生?とあかりは考える。

甲田「6年2組の担任になった甲田 由子です。何か遭ったか分かりませんが遅刻をしない様に気を付けましょうね」

あかり「ご、ごめんなさい!バスに乗り遅れてしまつて」

慌てて謝罪するあかりに甲田はそうでしたかと納得して入る様に促す。

先生が来た事で生徒たちは各々の席に座る。

甲田「班も係もホームルームの時に決まっちゃったわ。桜さんは集配係ね。それから席はあそこね」

送れたあかりに教えてから席の場所を指さすとそこは祐馬の隣であった。

あかり「(ゆ、佑馬くんの隣!?!ホントに!?)」

アンリ「(おー、これはあかり。授業に集中できるか心配だな)」

ドキドキするあかりにアンリは大丈夫かねえ…と思っている。と甲田が自己紹介して欲しいとお願いで来る。

遅れて来たあかりが仲間外れにされない為の配慮だろうか沢山アピールしてねと付け加える。

あかり「(あ、アピールって…ど、どうしよう)」

アンリ「(流石にこう注目されてたらな…)」

興味津々で見ているクラスメイト達にあかりは冷や汗を流しまくる。

流石に長引かせられないと感じて無難に名前だけ名乗ったらどうだとあかりにアドバイスする。

あかり「さ、桜あかり…です…」

自己紹介すると知っていると云う声の後にモニカの名前が出てクラスメイト達は騒ぎだす。

あかり「(ああ、やっぱりそうなるよね…)」

アンリ「(ホントこれには困ったもんだよね…)」

乾いた笑いしか出せないあかりの中でアンリは頭を抱える。

実はと言うとこの状況は話題となつてゐるモニカ自身もあかりが心の中にいる時にアンリが変わつてゐる間に教えて貰つていて頭を悩ませているのだ。

今はなるべく中等部の生徒達に自分の妹だからとプレッシャーをかけないで欲しいとお願ひしてゐたりする。

だが初等部ではこの通り、ファンが多く、モニカ自身もどう言えばあかりの負担を減らせるか目下悩み中である。

アンリ「(こういう奴らのせいであかりとモニカの仲がギクシヤクしてるからな…)」

モニカ自身、あかりに気を使わせない様に振舞つてゐるがなんとかしたいと言ふのはアンリ自身知つてゐるので2人の苦勞を減らしたいのだ。

男子生徒1「妹全然にてねえ！」

男子生徒2「マジ似てないな！」

女子生徒1「モニカ様に似せろつて言ふのが無理だつて！」

女子生徒2「言っちゃ悪いよ」

グサグサグサグサ!!

あかり「(言わないでそれは。分かってる…分かってるんだけど…)」

アンリ「(こいつら…)」

その後心もとない言葉が飛び出してあかりは涙目になり、アンリは思わずあかりと強制的に入れ替わって怒鳴ろうと出かけそうになった時：

パンパン！

甲田「皆さん！あかりさんはあかりさんです。勝手に比べて、似てないなんて言うのは失礼じゃないですか？モニカさんを慕っているのならば、妹だからと言って心もとないうでしようか？」

手を叩いて注目を集めてから注意する甲田に言っていた生徒たちは顔を伏せ、すいませんでしたと謝る。

その後甲田もごめんねとあかりに謝罪する。

あかり「(甲田先生…！)」

アンリ「(ありがとな甲田先生。おかげで助かったぜ)」

その気遣いにあかりとアンリは感謝し、席に座ってちようだいと促されて指定された

席に座る。

座った後、あかりは隣の祐馬を見る。

あの騒ぎの中で祐馬だけは窓の外を見ていて参加はしていなかった。

あかり「あ、あの…よ、よろ…」

声をかけるあかりだが声が小さいからか祐馬は微動だにせず、あかりの方に顔を向け
ない。

あかり「う……う……う……駄目だあ」

アンリ「(前途多難だなこりゃあ……)」

恥かしくて机に突っ伏すあかりにアンリはやれやれと肩を竦める。

そんなあかりをちやつかり見に来ていたルビーが思いつめたように見ていた。

☆

しばらくしてルビーも連れて戻ったあかりは制服から私服に着替え、ベランダから海
を見ていた。

あかり「はあーあ、どうして言いたいこと言えないのかな…」

アンリ『まあまあ、これから1年一緒なんだし、気長に行こうぜ』

黄昏るあかりにアンリがそう励ます。

アンリ『ただあのクラスの連中には本当に困ったよな…先生が助けてくれなかったら

絶対に言いまくってただろうしな……」

あかり「そうだね……」

ルビー「ごめんなさい!」

困った様に言ったアンリにあかりが同意した時、隣であかりを見ていたルビーが突然謝る。

あかり「ま、まだ居たの!？」

連れて来たが家の前で置いてお家に帰ったらと言って別れたつもりだったのだが、まだいたのにあかりは驚きを隠せない。

ちなみにアンリは知ってはいたがあえて言わなかった。

ルビー「ごめんなさい!ごめんなさい……!あたし……あたし……役に立とうと思ったの……なの……」

涙を流しながら謝るルビーにあかりは教室でのあかりの様子を見ていて、それが自分のせいだと思って謝ってくれてるんだと察する。

あかり「いいよもう。自分がかっかりして落ち込んでいただけ。ルビーのせいじゃないよ」

ルビー「あかりちゃん…優しい」

そう返して部屋に入るあかりを見て言ったルビーのにアンリは同意する。

自分を拒絶せずに受け入れてくれたあかりの優しさに救われたのだから……

あかり「でも……ねえ……あー佑馬くんが居てもみつちゃん達が居ないんじや憂鬱だよー」

アンリ『まあ、休み時間に会いに行けば良いが、授業してる時は退屈しそうだな』

ふうと息を吐いて膝を抱えるあかりにアンリはそう返す。

ルビー「ようし！見ててあかりちゃん！ティンクルティンクルマジカルチャーム！」
そんなあかりを元気づけようとルビーはあかりの部屋に飾られていたヌイグルミに向けて魔法を放ち、かかる様に願う。

その願いが届いたのか、猫のヌイグルミが動き出す。

ルビー「やったー!!あかりちゃん！」

あかり「え、え!?!なに!?!」

成功したのに喜びの声をあげたルビーにあかりが驚いていると動き出した猫のヌイグルミとテーブルの上に乗って手を取り……

ルビー「ファイ！ファイ！あかりちゃん！元気出してあかりちゃん！ハッピーハッ

ピー！ワン・ツー！ワン・ツー！」

応援ダンスを踊ってあかりを元気づけようとする。

そんなルビーにあかりは釘付けになる。

アンリ「(ルビーの奴、あかりを元気づけようとしてくれるのか……良い奴だな)」
応援ダンスにアンリもまた嬉しくなる。

ルビー「ハッピーハッピーきやう！」

ヌイグルミと共にダンスしてる所で足を滑らせて人形と倒れる様子にあかりはくすりと笑う。

そのまま踊り続けようとして途中で猫のヌイグルミは元に戻る。

ルビー「あ」

あかり「ねえ、それは本当に魔法なの？ルビーって一体誰？喋れる兔なんて不思議すぎるよ」

そんなルビーへとあかりは話しかけるとルビーはびよんとあかりの持つクツシヨンの上に飛び乗る。

あかり「瞳なんてキラキラしてるし……」

ルビー「わたしはね、ジュエルペットよ。瞳は魔法の宝石で来ているの」

ジュエルペット？と呟くあかりの中でやっぱりな〜とアンリが思ってる間にルビーの説明が続く。

ジュエルペットはジュエルランドと言う魔法の国に住む生命体で、そこに住む人達は魔法や錬金術が使えるなどの事を言うからルビーは目を輝かせて言う。

ルビー「今のわたしよりずっとずっと凄いや魔法だよ。とにかくね、なーんでもできるの」

あかり「ふうーん、魔法かあ……私も魔法が使えたらいいのにな」

アンリ「（いやまあ、頑張れば出来るっちゃあ出来るんだよね……）」

猫のヌイグルミを起こしながら言ったあかりのにアンリは複雑な顔で唸る。

あかり「そしたらいつも言いたいことをはつきりと言える子になれるかも。それから佑馬くんといっぱいお話しできるようになってそれから……」

アンリ「（あかり……）」

出て来たのにアンリはほろりと涙が出そうになった。

それだけあかりが欲してる事なのはアンリ自身知ってるからだ。

あかり「……なんてね。そんなわけないのに……」

アンリ「（……）」

悲しげに言うあかりにアンリは悔しい気持ちになる。

話を聞いたルビーもまた悔しそうに体を震わせる。

ルビー「わたし……わたしが凄いや魔法使いだったら……そしたら……そしたら今すぐあかりちゃんの夢、全部叶えてあげられるのに！」

アンリ「（出会ってまだ短いのに……あかりの事を思ってくれるとはな……）」

未熟な自分に嘆くルビーにアンリはジーンとなる。

あかり「い、いいいいよ。冗談だよ」

ルビー「だってだって……あ、そうだ！」

慌ててそう言うあかりにルビーは顔をブンブン振った後に何か思いつき……

ルビー「ティンクルティンクルマジカルチャーム！」

再び呪文を唱えるとルビーの頭に付いてるのと同じ花飾りが出現してからあかりの頭の右側に装着される。

あかり「私に？」

ルビー「うん！あかりちゃんに！」

プレゼントに聞くあかりにルビーは元気よく返す。

あかり「ルビーと御揃い？」

ルビー「うん、御揃い！」

その優しさが嬉しかったのであかりはうふふあははと笑う。

ルビー「あかりちゃんが笑った！わくわくい!!」

アンリ「（あかりの奴、元気出たみたいだな。良かったぜ……）」

喜ぶルビーを見てアンリはふっと笑う中であかりは笑い終えて自分を笑顔にしてくれたルビーに顔を向ける。

あかり「なんだか元氣出てきちゃった。ルビーのおかげだね」
そう言つてルビーを抱き上げる。

あかり「今日は色々あつたけどルビーに会えて良かったよ」

ルビー「あかりちゃん」

そのまま自分の体に引き寄せてありがとうとお礼を言つた時だった。

ルビーの胸中央が光り出す。

あかり「な、なに!?!」

アンリ「(この現象…もしかして!)」

いきなりの事にあかりが驚く中でアンリはまさかと察すると光があかりの左手に集まつて、それは中央に赤いハートが描かれたタマゴの様なものになる。

あかり「何この赤い宝石、ルビー!?!」

アンリ『噂で聞いていたがこれがジュエルペットとパートナーになつた証なのか…?』

重さとルビーの名前から宝石だと理解するあかりの中でアンリは自身があかりの中にいる前に得た知識から引き出してほへーとなる。

ルビー「私のジュエルチャームがもう一つ……そ、そうか!」

それを見てルビーはどこからともなくスマホの様なものを取り出す。

アンリ「(なんだ?あのスマホみたいなのは...)」

ルビー「やっぱり……やっぱりあかりちゃんだったんだ!心がピッタリ合う女の子。ステキステキ!」

あかり「なに?どういう事?」

表示されてるのを見て嬉しそうに言うルビーにあかりは戸惑って聞く。

それは……とルビーが説明しようとした時……

???「あー!先越された!」

突然の声に驚いて声が出たベランダを見る。

そこにはルビーと違い顔と胸部分を除いて黒く、頭の飾りが紫色の蝶になってる兎がいた。

あかり「誰!?!」

ルビー「あ、ルーア!やっほー!」

アンリ「(ルビーの知り合いか?)」

驚くあかりを横でルビーは呑気に挨拶する。

現れたのに今日は長くなりそうだな……とアンリは戸惑ってるあかりの中で思った。

こうして、物語は始まった。

宝石の獣と特殊な存在を内包した少女の少し変わった物語が……

第二話く黒兎とジュエルランドにどつきどつき！く

前回、ルビーと出会ったあかりとアンリ。

聞こうとした所でルビーとは別の兎、ルーアが現れた。

あかり「ルビー、知り合い？」

ルビー「うん！わたしの幼馴染でブルーアパタイトのジュエルペット、ルーアだよ」
ひとまず彼女が何者なのかを聞くあかりにルビーは元氣よく言う。

ルーア「ご紹介に扱われた通り！あたしはルーア！ルビーとはライバル関係よ！」
アンリ「（こいつもルビーと同じように人間のパートナーを探しているのか？）」

近寄って自信満々に言うルーアにアンリは訝しげになるがなんと言うか彼女に少し引つかりを感じた。

それがなんだろうかと考えてる間にルビーが話しかける。

ルビー「えー、わたしはルーアの事ライバルと言うより親友って思ってるのにー」

ルーア「ら、ライバルでも良いでしょ！とにかくく！」

そう言っつてずびし！とあかりを指す。

ルーア「私はあなたをパートナーにしたいのよ！」

あかり「ええ、私!」

驚くあかりにそうよと頷いてからルーアは続ける。

ルーア「私はね。朝、学校に向かっているあなたを見た瞬間に確信したのよ。私のパートナーはあなたしかいないって!」

あかり「(え、ちよつと待って…それでもしかして…)」

アンリ『…え?マジで!』

ルビー「ルーアもあかりちゃんに心がピッタリ合う女の子だったんだね。すつごい奇遇だね。」

理由にあかりとアンリは驚き、ルビーは嬉しそうに言う。

ルーア「つて事であかりだっけ…私とパートナーに…」

あかり「ちよ、ちよつと待って…えつと…」

ルビーをグイグイ押しつけて詰め寄ろうとするルーアにあかりはアンリの事をどう言えば良いか悩んだ時…

♪

ルビー「あ」

押しのけられた際にルビーの手が持っていたスマホの様な奴の画面を触れてスライドさせてしまう。

その瞬間、あかりを中心に魔法陣が展開される。

あかり「え!？」

アンリ「ちよ、おいまさか!?!？」

ルーア「ちよ!?!?何しちやってんのよ!?!？」

いきなりの事で驚くあかりだがアンリとルーアはそれが何なのか察する。

足元の目が向いていたのであかりやアンリは気づいてなかったが机に置かれていたノートパソコンが勝手に開いて画面にルビーが最初に見たのが映し出されていた。

ルビー「ま、またやっちやった?」

あかり「やっちやったつて…え、え?」

困った様に呟くルビーのにあかりは戸惑ってる間に体が浮かび…

あかり「ええええええええええええ!?!？」

そのまま頭上にも現れた魔法陣へと吸い込まれてしまう。

☆

いくつもの魔法陣がある空間、その一つからあかりとルビー、ルーアが飛び出す。

あかり「なにこれ!?!ルビー!！」

ルビー「だ、大丈夫だよあかりちゃん。えつと…出た!呪文!ティンクルティンクル・マジカルチャーム、ウィンクルウィンクル・ジュエルフラッシュ。覚えた?あかりちゃん」

ルーア「いや、そうじゃないでしょ!呪文を聞いてるんじゃないか?ここがどんなのかわからないよあかりは!簡単に言うところはあかりの住んでる世界と私とルビーの住んでる世界を結ぶ空間!んでもうすぐ着くわよジュエルランドに!」

戸惑って聞くあかりに対してスマホの様なのを操作して出したのを読むルビーにルーアが早口でツツコミを入れてからあかりに対して答えた後に別の魔法陣を潜り抜ける。

そして、見えた光景にアンリは眩く。

アンリ『…此処が…ジュエルランド』

あかり「あれ?ここ、地面は…?」

懐かしさに入りたかったがあかりの言葉にあ、落ちるなど悟った瞬間…

ぴゅゅゅゅゅゅゅゅゅゅ!

自由落下が始まった。

あかり「たすけてー!?!」

ルビー「あかりちゃん、一緒に唱えて!魔法の呪文を!」

ルーア「さつきルビーが言った奴!!」

2人の言った事にあかりは無理だよ！出来っこないよ！と涙目で叫ぶ。

ルビー「出来るよ！出来っこないって言っっちゃやだ！あかりちゃんにも魔法は使えるの！心がピツタリなんだもん！二人一緒なんだもん！」

アンリ『あかり、ルビーを信じてやれ。大丈夫だ。オレもお前とルビーなら出来ると信じてる！』

あかり「ルビー…（アンリ…）」

お互いに見つえあう中で手を取り合う。

あかり「二人一緒なら…」

ルビー「なれるの」

下をみつえ、1人と1匹は呪文を唱える。

ルビー「輝く勇氣はルビーの印」

ルビー&あかり「ティンクルティンクル・マジカルチャーム！ウインクルウインクル・ジュエルフラーツシュ！」

呪文を唱えると共にあかりの持つジュエルチャームが輝き、放出された光りがあかりの体を包み込むと着ていた服が変わる。

お姫様の様なピンクのドレスに羽を思わせる白いマント、頭に花びらを感じさせるり

ボンが結ばれている。

そのままルビーとルーアを両肩に乗せたあかりは虹色の球体に包まれて下にあった湖の上で浮遊する。

その後にあかりは自分の今の姿に感動する。

あかり「これが…魔法!?!」

ルビー「そうだよ。魔法だよ」

ルーア「ホント、羨ましい」

感動してる2人を見てルーアは羨ましそうに呟く中であかりは改めて周りを見る。

あかり「私、浮いてる…!」

アンリ『やったなあかり』

自分が受けている事に興奮してあかりは球体が消えた後に自力で飛ぶ。

あかり「ルビー! 私飛んでるよ!」

ルビー「うんうん!」

ルーア「初めてなのに上手いわねあかりは…」

嬉しそうなルビーと感嘆するルーアのを聞きながらあかりは改めてジュエルランド

の美しき光景に感動する。

あかり「うわ〜! ここがジュエルランド!」

ルビー「そうだよ。魔法の国だよ！ジュエルランドは星の数と同じ宝石で出来ているの。オーロラや神殿も、ユニコーンの泉も。みんなみんな、ジュエリーナ様の魔法で守られているの」

アンリ『……………』

説明したルビーのを聞いたアンリはどことなく悲しい感じになったのにあかりは怪訝となる。

ルーア「？どうしたのあかり？ルビーの説明に何か疑問があったの？」

あかり「う、ううん！何でもないよ」

そんなあかりの反応に気になって聞くルーアにあかりは慌てて笑って返す。

ルビー「良かった」

笑うルビーにあかりも微笑んでから見える建物へと飛ぶ。

あかり「ルビー、あそこは？」

ルビー「あそこはね私とルーアが通う魔法学校だよあそこの庭に降りようか」
分かったとあかりはルビーのお願いに了承して向かう。

その際にあかりの目を落としてアンリはルーアがやばっとなつているのに気づく。

その間に降りる庭でルビーとルーアと同じジュエルペット達が駆け寄るのに気づいてその前に降り立つ。

複数のジュエルペットにあかりは感嘆してるとうっほんと言う声の後に大きな黄緑色の水晶玉に乗った老人が来る。

ルーア「モルダヴァイト校長先生」

アンリ「(あの爺さんが校長先生か…)」

モルダヴァイト「ルビーとレアレアの女の子よ。我が魔法学校の入学を認めよう…それでルーアよ」

その老人を見て呟いたルーアのにちっさいな…とアンリはあかりより小さいモルダヴァイトを見て思った。

モルダヴァイト「ルビーと共にいるが…ルビーとは別にお主と心が合うレアレアの女の子は見つからなかったのかのう…」

あかり「えっとそれなんですけど校長先生」

んん？と首を傾げるモルダヴァイトにあかりが恐る恐る話しかける。

モルダヴァイト「む？何かなレアレアの女の子よ？」

あかり「えつとですね…実はルーアと心が合う女の子は私の他にいます…(つて言っちゃったけど…話して大丈夫だったアンリ?)」

顔を向けるモルダヴァイトにそう答えながらあかりは心の中でアンリに聞く。

アンリ『もうジュエルランドに来ちゃったからな。それに、さっきの校長の言い方

からするとルーアもルビーと同じ様に探してみたいだしな』

戸惑うルーアをあかりの目で見ながらアンリはそう返す。

その後にあかりは目を閉じ、アンリは出ようと意識を集中する。

その中でうそー!?や何が起こってるの!?!と言う戸惑いの声が入った事で目を開き……

あかり「あ、アンリ……」

アンリ「……………は？」

隣から聞こえる声にアンリは慌ててみると驚いた顔をしたあかりがいた。

どういふ事かと思っているとルビーがあーと声をあげる。

ルビー「あかりちゃんにそっくり！けどその目！私があの時見たあかりちゃんだ！」

ルーア「この感じ、もしかしてあなたが……」

モルダヴァイト「こ、これは一体……」

ざわめきが起こる中でアンリは自分はどうなってるんだと思っていると……

???「はい、これで自分が今どんな感じか感じか分かりますよ」

その言葉と共に自分の前に手鏡が差し出され、アンリはその人物を見ずに手鏡を見る映し出されたのは髪の色が黒っぽくなり、後ろの束ねてる髪が左側に変わって目が真紅色ですこしツリ目になったあかりの顔があった。

これは一体……と思っていた所に別の驚きが来る。

モルダヴァイト「じゅ、ジュエリーナ様!?ど、どうしてこちらに!」

アンリ「じゅ、ジュエリーナ!?(いきなり再会しちゃった!?)」

慌てて顔をあげるとそこには見覚えのある女性がいた。

思わず顔が強張るアンリだがジュエリーナは安心させる様に微笑んで頭を撫でる。

ジュエリーナ「初めまして、私はジュエリーナ。魔法の国ジュエルランドを統べる女

王です」

あかり「は、はじめましてジュエリーナ様。私は桜あかりです」

偉い人だと理解して慌てて頭を下げ自己紹介するあかりに畏まならくて良いです

よとジュエリーナは微笑む。

その微笑みにあかりはあれ?となる。

その微笑みをどこかで見た事ある気がするのだ……

なんで?と首を傾げてるあかりからルーアと戸惑っていたルーアを抱き上げた後に

アンリへと差し出し、戸惑っていたアンリは素直にルーアを受け取る。

ジュエリーナ「ルーア、良かったですね。あなたと心が合うレアレアの女の子と出

会って」

アンリ「(…ジュエリーナの奴。オレの事を人間と誤解してるのか?それとも…)」

出て来た言葉にアンリは警戒する中でモルダヴァイトやもう一人いた教員と思われる女性も戸惑った様にジュエリーナを見る。

ジュエリーナ「ジュエルペットが自分と心が合うと言ったのです。ならば見守りましょう。どう成長していくかを……だから……この子をお願いしても宜しいですか？」

アンリ「あ、ああ……」

頷いた後にアンリはルーアを見る。

アンリ「つてな事だ。まあ色々と変なことになったが宜しくなルーア」

ルーア「こつちこそ！あなたが私のパートナーなのが嬉しいわ！それであなたの名前は何？」

そう言えばそうだったなとアンリは笑って名乗る。

アンリ「オレの名前はアンリ。桜アンリだ」

ルーア「アンリね！宜しくね！」

肩に移動して言葉を交わし合った後にルーアの胸の所が輝き、アンリの左手に集まると宝石が現れる。

それはルビーと違い色がこちらは全体が紫色で、中央のが青色の蝶であった。

色合的にそうなるよな……とルーアを見てアンリは思った。

ジュエリーナ「モルダヴァイト校長」

モルダヴァイト「!うっほん!では、ルーアとレアレアの女の子よ。我が魔法学校の入学を認めよう!」

促されてモルダヴァイトは慌ててそう言う。

それに真つ先に喜んだのはルビーであった。

ルビー「やったねルーア!一緒に魔法学校に入学できて!」

ルーア「あ、ありがとう。だけどライバルとして負けられないからね!」

ズビシツと指すルーアにアンリは苦笑する。

楽しいに話すあかりやアンリ達を見てモルダヴァイトと女性教師は微笑まじげに見た後にジュエリーナの方を見ると何時の間にかジュエリーナはいなくなっていた。

そのジュエリーナはもう学園から離れた空へ飛んでいて、アンリの事を思い浮かばせてくすりと笑って自分の城へと戻る。

ジュエリーナとアンリ達は知らなかった。

自分達を見ていた存在が2人いた事を…

??? 「あれがあかりとアンリ…。まさか入学する日にジュエリーナが現れるなんて…」

その1人である少年は笑い合う2人を見ており…

??? 2 「ちよちよちよちよ!?!?!どういう事!?!なんで桜あかりが分裂して、しかもジュエ

リーナがなんで現れるの!?)」

もう片方の少女は自分の知る事とは違う出来事にそれをなんとか出さない様にして
内心焦っていた。

??? 「ん? どうした ■■■。そんなに驚いて」

??? 2 「いや、いきなり分裂されたら驚くでしょ」

確かにと返された事に納得する少年に少女は内心安堵する。

??? 「あの二人の力……じっくりと調べないといけないな」

そうねと少年の同意しながら少女は瞳に暗い輝きを秘めながらあかりを睨む。

??? 2 「(あかり……■■■に注目されるなんて……)」

ギリッと唇をかみしめ、握りこぶしを作る。

その間にあかりはアンリと共に人間界へと戻って行く。

☆

夜、パジャマに着替えたあかりはふうと息を吐いて目を瞑る。

そして目を開くと別の場所になっていた。

そこはあかりの心の中にある世界でテーブルを挟んでアンリが座っていた。

あかり「今日は色々とビックリしたね」

アンリ「まさかジュエルランドでだけ分離できるとはなあ…」

興奮冷めやらぬ感じで言うあかりにアンリは苦笑する。

アンリ「まあでも楽しくはなりそうだよな」

あかり「あはは、けど大変だよね…こっちの学校と両立しないといけないし」

困った様にぼやくあかりにアンリはあ…と目を泳がせる。

アンリ「(あかり気づいていないのか。ジュエルランド行っている間は時間止まっているって事に)」

もしかするとルビーのアクセサント的なのもあつて急だったから気づいていなかったのかもしれないと考えて温かい目であかりを見る。

あかり「な、なにアンリ。その温かい目は…」

アンリ「いや、これであかりも姉ちゃんの事を言われない学園生活を送れそうだなと思つてな」

あかり「…え?」

そう言われてあかりは目を丸くする。

アンリ「だって魔法学校の奴らは姉ちゃんの事知らねえんだし」

あかり「あ、そうか…」

流石に地元とかだったら知られてるかもしれないけど……と楽しくなってるあかりを見ながらアンリはそれを口に出さずに押し込める。

あかり「アンリ、私魔法学校に行くのが凄く楽しみになってきた！」

アンリ「はは、全く」

目を輝かせるあかりにアンリは苦笑する。

あかり「それに……アンリと一緒に学校に通えるつても楽しみな」

アンリ「……そっか」

笑顔で言うあかりにアンリは照れ臭そうに顔を逸らす。

そんなアンリにあかりはふふと笑った後にあくびする。

あかり「そろそろ寝ようか」

アンリ「お、そうだな。オレは少ししてから寝るわ」

それじゃあお休みと手を振って歩き出すあかりにアンリも手を振った後にふーと見上げる。

アンリ「まさかジュエルランドに帰ってきた上にその日にジュエリーナと再会するとはなあ……」

会うのが一番避けたかった人物だったのだが、彼女自身はアンリの事を警戒するそぶりを全然見せず、温かく見ていた。

アンリ「……だけどオレにとってはそれがムカつくんだよな……」

思い出してからアンリは顔を顰める。

アンリ「ああ、クソっ。あかりのおかげで収まっていたオレの負の感情が出てきまい
そうだ……」

頭を振った後に頬を強く叩く。

ただ叩き過ぎたのかいてえと呻く。

アンリ「……やつぱりいつか選ばないといけないんだな……あかりの夢を叶える手伝
いをするかそれとも……」

その後の言葉は口から出なかった。

その言葉を出したら自分はあかりといられなくなると確信してるからだ。
だからあかりとの一生の別れになろうとした時にと心に秘める。

その後にあくびをして立ち上がる。

アンリ「……さてそろそろ寝るか」

このままだと悪循環と考えて心の中での自分の部屋へと向かう。

アンリ「(できたら最高の思い出を作りたいよな……)」

そう考えながらアンリは眠りに付く。

2人の魔法との出会い。

これがどう言う感じになるのか…

第三話～ジュエルランドの出会いにドッキドキ!～

彼女を感じる様になったのは3歳の時だった。

1人寂しい時に眠りに付いた時に何も無い所で彼女と出会った。

驚く彼女にここはどこと聞いてこう答えられた。

ーここはお前の心の中だよー

☆

感じる日差しにあかりはんと声を漏らして目を覚ます。

あかり「ん…今のって…」

アンリ『おはようあかり。よく寝れたか?』

体を起こすあかりにアンリは挨拶する。

あかり「おはようアンリ。うん、よく寝れたよ」

アンリ『そっか、昨日は色々とあったから眠れてるか気になってたんだよな』

そう返すあかりにアンリはそう言う。

あかり「……昨日のは夢じゃないんだよね」

確認する様に聞くあかりに当然だぞとアンリは返し……

アンリ『そこに居るしな』

そう言われて小型テーブルの方を見る。

ルビー「うわあ、美味しい」

ルーア「美味しいわねこれ」

そこではルビーとルーアがマカロンを嬉しそうに食べていた。

あかり「ルビー!? ルーア!？」

ルビー「あ、あかりちゃん。レアレアの食べ物美味しい」

ルーア「置いてあったから食べさせて貰ったわよ」

驚くあかりにルビーとルーアはマカロンを手に呑気に返す。

アンリ『な、夢じゃないだろ?』

あかり「うん!」

嬉しそうにベッドから出て、降りると食べ終わったルビーとルーアが抱き着く。

ルビー「迎えに来たの! 魔法学校に行こうよ。早く!」

ルーア「そうそう! 早く行くわよ!」

急かす2人にあかりは困った顔をする。

するとアンリが入れ替わって出る。

アンリ「あーちよつと待て、あかりはまだ魔法学校に行くこと決めてないぞ。ジュエルランドの事もよく分かってないみたいだし」

ルーア「あー…成程」

確かに全然説明してなかったなとアンリの言葉にルーアは理解して納得するがルビーだけ不思議そうに首を傾げる。

ルビー「どうして？一緒に魔法を習うの、きつと楽しいよ」

アンリ「それは分かっているんだが……んーようするにあかりは魔法学校とレアレア界…こつちの学校両方通えるかどうか悩んでいるんだよ」

ルーア「そこらへんに関しては大丈夫なのは大丈夫よ……実は……」

トントトン！

そう返すアンリの後にルーアがそう言ってどうして大丈夫かの理由を説明しようとしてドアがノックされる。

その後にモニカが入って来る。

モニカ「あかり、アンリ、ご飯よく…ってアンリが出てるなんて珍しい…ん？」

声をかけてから目を見てアンリと察して呟いた後にルーアとルビーに目を向ける。

あかり「お、お姉ちゃん！お、おはよう!!」

慌ててあかりが前に出てルビーとルーアを後ろに隠す。

モニカ「あ、起きてはいたんだって、今何を隠したの？」

あかり「え、ええつと……」

アンリ『あかり、流石に隠しきれないぞ』

そう言いながら近づくとモニカに誤魔化そうとするあかりだがアンリが諦めろと言う。

彼女の言う通り、あかりの腕からルビーは体をよじって抜け出してから左肩にしがみ付き、右肩に同じ様に抜け出したルーアがしがみ付く。

モニカ「ほら、後ろ……って、ウサギ？しかも2羽も？」

目をパチクリさせるモニカにそ、そうなの！と慌てて頷いて前に出す。

あかり「昨日見つけて拾ってきちゃったの。飼っても良いかな？」

アンリ『いやまあ、普通の兎じゃねえから飼うつつうより居候が合ってるかもしれないけど知らないから……良いか』

ツツコミを入れてから途中で放棄するアンリを知らずにそうね……とモニカは頬に指をあてて呟き……

モニカ「とりあえず、ママから許可を貰いましょうか」

あかり「う、うん」

母親にも見せてからと言うモニカにあかりは頷き、2人を抱えて向かう。

万里絵 「ふうん。兎ねえ……」

ネクタイを締めながらルビーとルーアを見る万里絵にあかりは私の部屋で飼っても良い？と確認する。

ルビーとルーアをじーーーーと見ていた万里絵は腰に手を当ててまっいつかと認める。

あかり 「ほんと、お母さん！」

万里絵 「その代わりあかりとアンリでちゃんと世話すること」

目を輝かせて喜ぶあかりに万里絵はそう注意する。

モニカ 「アンリはしつかりしてるから良いけど、あかりは出来るの？」

アンリ 『まあできるよなあかり』

あかり 「できるよ。ね！」

心配そうに聞くモニカにそう言うてからルビーに声をかけ、ルビーも首を縦に振る。

万里絵 「ん？」

モニカ 「今、頷いた？」

あかり 「に、ニンジン！ニンジンあげようかな」

少し驚く2人にあかりは慌ててルビーとルーアを抱えてキッチンに向かう。

アンリ 『い、今のは危なかったな……』

あかり『ご、ごめん。つい』

ふうと安堵の息を吐いてるだろうアンリにあかりは謝りながら自分で言ったニンジンを探す。

ルビー「ねえ、早く行こう魔法学校」

あかり「だから今日は駄目。お母さんとショッピングの約束あるの。6年生になったから新しいお洋服買ってくれるって」

嬉しそうに言うあかりにそれは仕方ないわねとルーアは納得する。

残念がるルビーにごめんねと謝りながらあかりは取り出したニンジン差し出す。

ルビー「あ、これってもしかして！」

あかり「うん、ニンジンだよ」

嬉しそうに齧るルビーにあかりはくすりと笑った後、万里絵の慌てた様な声が入る。

万里絵「あ、いけない。もう行くわ」

あかり「え、何処に？」

慌てて立ち上がるあかりに万里絵は申し訳なきように手を合わせる。

万里絵「急な仕事が入っちゃって、しかも私でやって欲しいって先方がお願いしてたそうなのよ。娘との約束があるって言ったけどそうしないと駄目だって担当する筈だった子から泣き付かれちゃって……ホントごめん！」

アンリ「母さんも大変だな……確か前もそんなことあったんじゃないかねえか？」

入れ替わって聞くアンリにそうなのよと万里絵はぶんすかしながら頷く。

怒っている万里絵だが実はと言うと昔はモニカの芸能活動や自身の仕事を優先させるあまり、あかりや夫に対する気配りに欠ける面があつて、あかりとの約束を度々破る事があつた。

そんな事もあつて3年前に万里絵があかりとの約束を破つた際はアンリの溜まつていた怒りが爆発、万里絵にあかりに変わって自分だけだった時のあかりの様子と寂しがっている事を怒鳴って伝えた事で万里絵は反省し、約束した日にある仕事を他の人に任せる様にして約束を守る様に心がけたのだ。

それでも芸能雑誌の編集長なので自分でやって欲しいなどの仕事は会社の信用や信頼関係を損なわない様に止む無く受けている。

万里絵「来週は必ず6年生に進級したお祝いとしての新しい服を買いに行くから！」

モニカ「あたしも今日は撮影でごめんね」

改めて買う約束を取り付ける万里絵の後にモニカが立ち上がつて言う。

あかり「撮影って……もしかして来月号のラブラーティーンもお姉ちゃんが表紙？」

うんと頷くモニカに人気者だねえとアンリは呆れる。

万里絵「だったらスタジオまで送つてあげる。本当にごめんねあかり。埋め合わせは

ちやんとするから！」

モニカ「行ってくるねあかり」

あかり「うん、いってらっしゃい」

そう言つて出て行く2人を見送つた後にあかりは寂しい顔をする。

前よりかまってくれるとはいえ、やはり寂しいのは寂しいのだ。

アンリ『大丈夫かあかり？』

あかり「大丈夫、それに今はルビーとルーアがいるからね」

心配そうに聞くアンリにあかりはそう返す。

☆

部屋に戻り、着替えてるあかりの後目にルーアとルビーはニンジン的美味しそうに食べる。

ルーア「ん〜、レアレア界のニンジン美味しいわね」

ルビー「ホントホント〜」

はふ〜と満足気な息を吐くルビーとルーアに呑気だねえとアンリは思つてる間にあかりは髪を纏め終える。

アンリ『それであかり、今日はどうする?』

あかり「決めてた予定が無くなっちゃったからね」

んじゃあやっぱりと聞くアンリにうんとあかりは頷いて満足を堪能してるルビーとルーアを見る。

あかり「ルビー、ルーア。私、魔法学校に行ってみようかな」

ルビー「ホントお!」

うわあ!と嬉しそうなルビーにうんとあかりは頷く。

あかり「でも見に行くだけだよ。魔法学校に通うなんてやっぱ無理。お母さんに何処行ってるのって言われちゃうし」

ルーア「あーそれなら大丈夫だと思っわよ」

え?とルーアの言った事にあかりは目をパチクリさせるとルビーがジュエルポッドを取り出して操作する。

その後に魔法陣が展開される。

あかり「きゃ!?!な、なに!?!」

いきなりの事にあかりは驚いていると後ろでパソコンが勝手に開いてあるホームページを表示する。

その後にあかりの腰に付けていたルビーとルーアのジュエルチャームが光り出す。

戸惑うあかりは外を見て驚く。

そこではすずめに襲い掛かろうとしてた猫が止まって自分達以外が全てが灰色になつてゐる光景であつた。

ルビー「あかりちゃんがジュエルランドに行つてゐる間、こつちの時間はすごくゆっくりになつちやうの」

ルーア「だからジュエルランドから戻つてきてもほんの少ししか時間は経つてないのよ」

どういふ事と驚いてゐるあかりにルビーとルーアがなぜこうなつてゐるかを解説する。

解説を聞いてそ、そうなんだとあかりは感嘆する。

ルーア「じゃ、行く途中で二人ともこれ舐めなさい」

ルビー「レアレアドロップ？なんですか？」

そう言つてレアレアドロップを取り出したルーアはルビーに呆れた顔をする。

ルーア「魔法学校にはこつちの様々な国の人達がゐるのよ。レアレアの子じや分らない言語もあるからレアレアの子には舐めて貰う様につて言われてたでしょうが」

忘れてたの？と呆れるルーアにそう言えばそうだったとルビーが頭をこつんとしてゐる間に浮かび上がる。

その後、ゲートを通り抜けるとあかりの隣にアンリが出現する。

あかり「あ、アンリ！」

アンリ「どうやらゲートを抜けると実体化できるみたいだな」

沢山ゲートがある空間の中で嬉しそうに言うあかりにアンリは自分の手を見ながら
呟く。

ルビー「今回はちゃんんと魔法学校のそばに着けるよ」

ルーア「大丈夫？ルビー。あ、二人ともはい、レアレアドロップ」

そう言つてアンリの方に投げ渡し、あかりには口を開ける様にお願ひして中に放り込
む。

あかり「あ、美味しい」

アンリ「こんな味なのかこれ」

口に入ったドロップを味わつてその味におおとなる2人。

まあ、ルビー達もレアレア界に来た時に食べてるのだから不味いのだつたら嫌な顔をする
だろうし…

その間にジュエルランドへのゲートを通り抜ける。

通り抜けた先は…空中であつた(爆)

あかり「え…」

ルーア「ちよ…!？」

アンリ「…おい」

広がる光景にアンリはルビーをジト目で睨んだ後…

びゅ~~~~~びゅ~~~~~!

落下し始める。

あかり「ちゃんと着いてないしー！ー！！」

慌てる中でアンリはルーア！と呼びかけ、ルーアもその呼びかけに察して頷き…

ルーア&アンリ「ティンクルティンクル・マジカルチャーム・ウインクルウインクル・
ジュエルフラーツシュ！」

呪文を唱え、服が変わった後にアンリはあかりとルビー、ルーアを抱えて浮遊する。

ちなみに変身したアンリの服装は服の上半分はあかりのを白い部分を黒にピンク部分を暗い青にして、髪飾りとリボンのハートを青い蝶に、耳飾りとネックレスを青い薔薇に変えた感じで腕部分は露出して手は指だしグローブを嵌めており、下部分はスパッツとミニスカートの上にロングスカートみたいなので覆っている。

あかり「あ、ありがとうアンリ」

アンリ「やれやれ、まさか初変身がこんな感じですかとはな…」

ルーア「も〜！ちゃんとしてよルビー！」

お礼を言うあかりのを聞きながらアンリはため息を吐いた後にプリプリとルビーに怒ってるルーアの小言を聞きながら手頃な木の上に着陸する。

ふうとあかりが安堵の息を掃いてると下から声が聞こえて来る。

??? 「ティンクルティンクル・レアルーラ！」

なんだろうと見てみると少年と犬のジュエルペットと猫のジュエルペットの前で2匹の猫のジュエルペットと共に魔法陣に包まれているあかりより年下の少女がいた。

あかり「ま、魔法だ……」

アンリ「魔法の練習でもしてるのか？」

うわあ……とあかりが声を漏らしていると光が晴れる。

遠目だったが少女の服装がさつきと違っていたのに気づく。

アンリ「服装が変わったな」

ルーア「そう言う魔法よ。他にも色々あるわよ」

へえ……とあかりとアンリが感心する中で少女はどことなく不満そうに顔を顰める。

少女「ダメ！ダメ！折角のお天気なのにコーデが決まってない！ガーネット！サン

ゴ！もう一回！」

そう言っ指指示する少女に頷いた後にサンゴと呼ばれた黄色い猫のジュエルペットとガーネットと呼ばれた赤い猫のジュエルペットは飛び上がる。

サンゴ&ガーネット&少女「ティンクルティンクル・ラララー！」
猫の仕草の様なポーズを取りながら呪文を唱え、少女の体が光りに包まれてから少しして、先ほどよりも動きやすい恰好になった以外に猫耳や猫の尻尾の様なアクセサリーを付けていた。

アンリ「まるで猫だな」

呪文を唱えるまでの流れを見てぼそりと呟くアンリにルーアも困った様に苦笑する中で少女はうつとりする感じに満足気であった。

少女「あく可愛い！私ってばこんな可愛くってどうしよう！」

ルビー「す、凄い……」

あかり「すてき……」

ただ自分酔いしれてるんだとアンリが呆れてる隣であかりは目を輝かせていると少年の向いてる方向から右側にいたジュエルペットがあかり達に気づいたのをあつと声を漏らし、皮切りに少年と少女達もあかり達に気づく。

ルビー「こ、こんにちわー」

少女「あら、あんた……」

挨拶するルビーに少女や少年たちが顔を向けたので改めて自己紹介する。

ルビー「新入生のルビーよ」

あかり「さ、桜あかりです」

アンリ「桜アンリだ。まあよろしく」

ルーア「アンリのパートナーのルーアよ」

んであんた等は？と聞くアンリに少女の傍にいたジュエルペット達が最初に自己紹介する。

ガーネット「私はガーネット。おしやれの事ならお任せ！」

サンゴ「サンゴにや。スイーツだーい好き！」

宜しくと挨拶していると少女は嬉しそうにあかりとアンリやルビー達を見る。

少女「そっか新入生！とうとう入ってきたのね。あたしより魔法がへたっぴな子」

何言ってるんだこいつと少女のにアンリがジト目になるがさらに続く。

少女「し・か・もルックス、地味」

あかり「はう!？」

少女「おしやれセンス、ダサッ」

あかり「うあ!？」

言われた言葉の槍があかりに突き刺さって涙目になる。

それと共にアンリの目がつり上がる。

少女「可愛い私が余計可愛く見えちゃう。って言うか私、二年生のミアア。よろし

く。私より魔法上手くなったら…許さないからね？」

ウィンクしてバキューンと指でつぼうする少女もといミアアにあかりは濃いなど思った後に隣を見てあつとなる。

アンリ「……………」

あかり「あ、アンリ。落ち着いて、落ち着いて…」

もう獲物を狙う狩人かと思える位に鋭い目つきをしているアンリにあかりは冷や汗掻きながら落ち着かせる。

そんなアンリの様子に気づいた少年も慌ててミアアを説得にかかる。

少年「み、ミアア。流石に言い過ぎだ。彼女達は新入生なんだから優しくするのも先に入った者の務めだよ。それで感じ悪いと思われたら嫌だろう；」

ミアア「それもそうね。流石レオン！」

褒めるミアアにレオンと呼ばれた少年はあははと苦笑するしかなかった。

その後自分の傍にいた犬のジユエルペットにこそこそ話しかける。

レオン「なあ、サファイー。アンリがニコラとチターナの二人に会ったらヤバくないか…？」

サファイー「ありえそう…あの2人はさつききのミアアの様にあかり抱えて降ってきて」

あかり抱えて降ってきて…とレオンが顔を抑えてる間にアンリはあかりを抱えて降ってきてミアア

と対面する。

アンリ「先輩だとしてもさっきの言いすぎじゃねえのか？」

ミリア「先に入った先輩としての威厳を出すのは当然でしょ。舐められたらいけないしね」

睨むアンリにミリアは軽く返す。

そんなミリアへこちらとレオンが軽く怒ってからアンリに頭を下げる。

レオン「気分を悪くさせてすまない。俺は魔法学校の5年のレオン。肩にいるこいつがパートナーのディアンだ」

ディアン「(ペコリ)」

サフィー「私はサフィー、ここにはいない沙羅のパートナーなの」

謝罪してから挨拶するレオンに彼の肩にいるディアンは目を瞑ってお辞儀し、サフィーも挨拶する。

あかり「どういう人なの？」

サフィー「沙羅は魔法学校四年。今、実験室で実験中よ」

質問するあかりにサフィーは簡単に教える。

へえくとアンリが感心した後レオンを見る。

アンリ「つて事は三人の中じゃ一番上がレオンなのか」

レオン「まあね。だけど2人だつて普通に勉強していればジュエルストーンが集まつて進級できるよ」

聞くアンリに答えたレオンから新たな用語が出たので2人は顔を見合わせる。

あかり「ジュエルストーン？」

そんなあかり達の反応にミリアは左腕を頭の横に持つていくと光が集まつて、光の輪と緑と黄色の2つの星が出て来る。

ミリア「魔法学校では魔法をマスターするとジュエルストーンを貰えるつてわけ」

サファイア「魔法力がステツプアップした時に貰える事もあるわ」

ガーネット「ジュエルストーンが二つ増えるごとに――」

サンゴ「学年も上に上がれるにやん！」

説明するミリア達のにアンリとあかりは感嘆する。

説明してる間に出したレオンのはミリアと違つて輪が2つでジュエルストーンは9つあつた。

アンリ「なるほどな。ミリアはジュエルストーンが2つで二年生。レオンは9個で五年生、あと一個ジュエルストーンゲットすれば六年生になれるつてわけか」

レオン「そう言う事。さあ魔法学校に行こう。色々と説明するよ」

手を差し出して言うレオンにあかりとアンリはうんと頷く。

レオンとミリアに2人のパートナーとまだ見ぬ沙羅と言う少女のパートナーと出会ったあかり達。

魔法学校で待っているのは…

第四話　夢を追い駆けてドツキドキ!!

歩く中、あかりは自身の足元を見る。

靴下だけだったが見かねたレオンがレオノーラと言う魔法で靴を創出し、ミリアがララルーラで可愛くしたのを履かせて貰ったのだ。

あかり「可愛い靴：2人ともありがとう」

アンリ「ホント凄いな魔法って」

ミリア「まあね〜♪」

レオン「2人だつて勉強すればできる様になるよ」

お礼を言うあかりとアンリのにミリアは自慢げに胸を張り、レオンはそう言う。

ルーア「アンリならすぐに魔法を使いこなせると思うわ。だつて私のパートナーだもん」

アンリ「高く持ち上げ過ぎな気もするけどな」

笑顔で言うルーアにアンリは困った様に頬を掻く。

あかり「ふふ、アンリ。照れてるね」

ルビー「あかりちゃんだつて頑張れば出来るよ！」

そうかな…と呟くあかりにそうだよとルビーは笑顔で言う。

ちなみにルーアはからかわない、と言うかやったらアンの機嫌が悪くなるのがさっきのミアのあかり弄りので分かってるからだ。

レオン「ふふ、仲が良いのは良い事だね」

ミア「にしてもホントそっくりね…双子なの？」

それに微笑ましそうにレオンが笑った後にミアが興味津々であかりとアンのを見る。

聞かれると思っていたあかりは困った様にアンのを見る。

あかり「え、ええつとそれは…」

アン「……」

ポリポリ頬を掻くアンリやあかりを見てレオンはあまり聞かない方が良くないかなと思
いミアの肩を叩く。

レオン「事情がある様だし、深く聞かない方が良くないよミア」

ミア「レオンがそう言うなら…」

少し物足りなさげに前を向くミアにほっと安堵の息を吐いてからあかりは小声で
アンのに話しかける。

あかり「助かったねアンリ。私たちの事、聞かれなくて」

アンリ「ああ、俺達のはんまり聞かれない方が良いしな…」
困った様に呟いた後に気づく。

2人の反応からして、どうやら自分達の事は広まってないみたいだ。

アンリ「(にしてもおかしいな？)ジュエリーナが来たからかなりの噂になっていると思つてたんだが…)」

あの場にいた面々を思い浮かべる。

ジュエリーナ以外にモルダヴァイト校長に女教師と数匹のジュエルペット。

ジュエリーナとモルダヴァイトに女教師を除いてジュエルペット達が話してそうだが、帰った後に喋らない様に言われたのだろうか…

アンリ「(まあおかげで助かったんだが…気になるな)」

うーむと唸っているアンリにルーアは首を傾げる。

ルーア「どうしたのアンリ？」

アンリ「あ、いや、改めてジュエルランドが凄いなと思つてさ」

声をかけられてアンリは慌ててそう言う。

ルーア「確かにそうね。でもこれからもいっぱい凄いなことがあるからこれで驚いてたら驚き疲れちゃうわよ」

ルビー「そうだよ楽しい所もあるからワクワクしちゃうよ」

へえくとあかりとアンリが感嘆していると見えたわよと言うミアの声に前を向く。

ミア「あれが魔法学校よ」

見えた魔法学校のにあかりはうわーと目を輝かせる。

屋根の色が綺麗な薄紫で入り口部分の所にリボンの装飾が施されている。

こういう感じなんだなと最初に降り立った時に見えなかった所を見てアンリはそう評した。

あかり「凄い場所だね！アンリ」

アンリ「そうだな」

話ながら魔法学校の中に入り、内装にほわーと声が出る。

ミア「ジュエルストーン、早く集めたーい。レオンは良いなー。もうじき12個だもんね」

声をかけたミアにレオンはああと頷く。

ミア「ジュエルストーン、十二個集まれば♪」

ガーネット&サンゴ「集まれば♪」

ルビー「どうなるの？」

ルーア「いや、知ったときなさいよ。ジュエルスターランプリに出場できるのよ」
ご機嫌に唄う1人と1匹に聞いたルビーにルーアが呆れて代わりに答える。

ルビー「ジュエルスター！知ってるよ！」

それは知っててなんでグランプリ知らないのよと呆れてるルーアの後ろでまた新たな単語が出たので戸惑うあかりにレオンとミリアが説明する。

レオン「ジュエルスターグランプリ。魔法のコンテストさ。ジュエルランド中の凄いな魔法使い達が集まるんだ」

ミリア「優勝したら、ジュエルスターになれるのよ！」

嬉しそうに言うミリアにあかりはそれだけ凄い称号なんだと驚く。

ガーネット「あー」

サンゴ「憧れの」

サファイヤ&ルビー&ルーア「ジュエルスター！」

アンリ「お前ら、ミュージカルみたいになってるぞ」

流れる様に言う5匹に打ち合わせでもしたんかと呆れているとあかりと共に呼ばれて声が出た方へと顔を向けると最初にジュエルランドに来た時に降りた魔法学校の庭にいたハーライトがチワワのジュエルペットと兎のジュエルペットと共にいた。

あかり「ハーライト先生」

アンリ「こんちわ」

挨拶するアンリのにこんにちわと返してからハーライトは言う。

ハーライト「ジュエルスターの事を話していたのね。ちょうど良いわ。四人に大切なものを見せましょう。レオンとミアも来ますか？」

ミア「はい！」

レオン「是非」

確認するハーライトのお誘いにミアとレオンも同行すると了承する。

では…とハーライトは呪文を唱えるとあかりとアンリ、ミアにマントが現れる。

あかり「こ、これマント？」

アンリ「魔法学校の制服みたいなものか？」

ミア「そう。魔法学校の正装よ。これから行くところがとても大切な所ってことよ」

大切な所と聞いてそう、なんだ…とあかりは実感沸かない声で呟く。

その後はハーライトを先頭に4人は歩く。

あかり「一体どんなところなんだろうね…」

アンリ「こつちも検討つかねえよな…」

お前等はどうなん？と腕に抱えたルビーやルーアに聞く。

ルーア「私たちもわからないわね」

私もくと返すルビーにアンリはホントなんだろうかと気になる。

ミリア「あの部屋よ」

あかり「あの扉の先のが？」

ミリアが指さした緑色の扉に開けてみるとハーライトに言われてあかりとアンリは扉を開ける。

中を見てあかりはあと声を漏らす。

部屋の中央には輝くティアラが置かれていた。

あかり「す、ステキ……」

アンリ「あのティアラは……？」

ハーライト「昔、わが校の生徒がジュエルスターグランプリに優勝してジュエルスターになったの。それはその時授かったものよ」

聞いたアンリはあれが……と呟いていると向かっている途中で自己紹介した兎のジュエルペット、ルナと一緒にいた犬のジュエルペット、ミルキイが言う。

ミルキイ「触ってみて、その光に」

あかり「え？」

ルナ「その光にはジュエルスターの輝かしい記憶が魔法で閉じ込めてあるんだな」
促されてあかりとアンリは触ってみる。

その瞬間、光が強まる。

あかり「!？」

それに目を瞑り、再び目を開いて入った光景にあかりは驚く。

広い会場の様な場所で沢山の人が歓声を上げており、あかりはこれがジュエルスターになった人が見ていた光景と思っていると目の前にジュエリーナが現れ、驚いていると体は勝手にしやがみ込む。

その間にジュエリーナはあかりの頭にティアアラを置く。

ジュエリーナ「あなた達はジュエルスターグランプリで見事優勝しました。今、ジュエルスターとなったのです。ジュエルスターには三つの願いを叶える魔法が与えられます。さあ唱えなさい。三つの願いを。どんな願いも叶うでしょう」

あかり「三つの…願い…」

言われた事にあかりは過去の記憶を見ていての奴とは言え悩んだ。

少しして我に返ると元の場所にいた。

先ほどまで見えていたのにあかりはアンリに話しかける。

あかり「アンリ、今のって…」

アンリ「ジュエルスターに選ばれた奴のデュエルスターになった瞬間の記憶だな」

戸惑うあかりにアンリは感慨深く呟く。

ハーライト「この学校の生徒は誰もがジュエルスターを目指して魔法の勉強をしてい

るわ。その訳がわかったでしょ？」

見終えたのを見計らって声をかけるハーライトにあかりははいと答える。

ミア「なりたーい！ジュエルスター！」

レオン「俺とディアンがなってみせるさ。そして三つの願いを叶えるんだ」

アンリ「どんな願いなんだ？」

興味津々で聞くアンリにレオンは得意げに答える。

レオン「ジュエルランドの国王になる。そしてジュエルランドと人間の世界を平和に導くんだ」

ミア「私は美少女シンガーになるの！今だって美少女だけでもっともって輝く美少女スーパーシンガー。世界一のクイーンオブポップになるの！」

2人の願いにほへえとアンリは感嘆の声を漏らす。

アンリ「二人とも凄い夢持っているんだな」

ミア「そう言う2人はどうなの？」

返されたのにアンリは呆気に取られる。

アンリ「オレの夢か。んゝそうだな…」

ルーア「どんな夢なの？」

ルビー「気になる気になる！」

そう言われてアンリはもったいぶった後に言う。

アンリ「……このジュエルランドの歴史に名を遺すことかね」

告げられた事にレオンはへえと感心し、ミリアも目を輝かせる。

ミリア「歴史に名を遺すなんて凄い夢じゃない！」

ルビー「あかりちゃん！あかりちゃんはジュエルスターになつたらどんな願いをするの？」

話を振られてあかりは戸惑う。

あかり「わ、私？」

レオン「そう。三つの願いが叶うなら」

アンリ「どんな願いでも大丈夫なんじゃねあかり」

戸惑いながらあかりは自分のジュエルチャームに触れて考える。

あかり「(叶えたい願い……)」

思い浮かべた事にあかりは頬を赤らめる。

ルビー「教えてあかりちゃん」

アンリ「恥かしがらなくても良いと思うぞ」

催促するルビーと胸を張れと言うアンリにでも……とあかりはモジモジする。

あかり「だって……私、皆みたいに大きな夢なんてないし。つまらない夢しかないし。」

言ったらきつと皆に笑われちゃうから…」

ミリア「言わなきゃ分かんないんだから言ったらいいじゃない」

レオン「(それに笑ったら隣の子が絶対に笑った人に怒ってから説教すると思うよ…)」
そう言ったらあかりにミリアはそう返し、レオンはアンリを見ながら内心そう思うのであった。

あかり「で、でも…」

そんなに渋ると見ているルーアとミリアにあかりは尻込みする。

アンリ「あかり、夢に大きいも小さいもないんだぞ。そう自分に卑屈になるなよ」

???'「その子の言う通りよ!あなたの夢が可哀そうよ」

励ますアンリの後に誰でもない声にあかりはえ?となって声のした方を見ると耳と尻尾が黄緑色の犬のジュエルペットがいた。

ルビー「誰?」

ミリア「ペリドット!」

誰?と首を傾げるあかりとアンリにハーライトが答える。

ハーライト「夢をかなえる力を持つジュエルペットよ」

アンリ「夢を叶えられるのか!」

驚くアンリに笑うペリドットにあかりも釣られて笑った時、あかりのジュエルチャ―

ムが輝き出す。

あかり「え!？」

アンリ「なんだ!？」

突然の事に驚いていると胸の中央から何が飛び出す。

それは緑色のあかりとなる。

アンリ「緑色のあかり!？」

ペリドット「あれはあかりちゃんの中にある夢よ」

あかり「私の…夢…」

出て来たのをペリドットが解説してる間、出て来たあかりの夢は小さくなって一緒に

出て来た星に隠れる。

ルーア「星になった!？」

ペリドット「あかりちゃんが恥ずかしくているからいじけちゃったのね」

あかり「ええ!？」

アンリ「夢もいじけるのか…」

呆れ半分感心半分で呟いたアンリに言ってる場合じゃないわ!とペリドットは星と

なつたあかりの夢を見る。

ペリドット「このままじゃ哀しくて消えてしまうわ」

アンリ「消える!？」

ルビー「消えちやうの!?!あかりちゃんの夢」

ルーア「それやばいじゃない!」

告げられた事にアンリとルビー、ルーアが驚愕する中で実感が湧いてないあかりは戸惑った様子で、その間に星は飛んで行ってしまふ。

ルビー「そんなのダメー!」

あかり「る、ルビー?」

それにルビーが叫んで前のめりになって床に落ちそうになるのをあかりは慌てて受け止めた後にルビーは涙を浮かばせてあかりを見る。

ルビー「あかりちゃん!夢を恥ずかしがらないで!」

あかり「え…」

ルビー「世界中の人が笑ったって、私だけは笑わないよ。あかりちゃんの夢!」

真剣な目で心に訴えるルビーにあかりはルビー…と眩く。

ルビー「だって私、ジュエルペットだもん!ジュエルペットは人間を幸せにする為に生まれたんだもん!私はあかりちゃんを幸せにするの!私の夢はあかりちゃんの夢がかなう事なの!だから…だから…」

アンリ「(ルビー…お前…)」

真剣に自分の思いと願いを言うルビーにアンリはフツと笑った後にルビーの頭を撫でる。

アンリ「ありがとなルビー。あかりのことを幸せにしたいって言ってくれて…ならあかりも頑張らないとな…」

あかり「…うん！」

頷いた後にルビーを抱き締めた後にあかりの夢を見る。

ルビー「追いかけてよう！あかりちゃんの夢！」

あかり「うん！」

その言葉と共にジュエルチャームが輝く。

ルビー「輝く勇気はルビーの印！」

ルビー&あかり「ティンクルティンクル・マジカルチャーム！ウィンクルウィンクル・

ジュエルフラーツシュ！」

呪文を唱えると共に全身が光に包まれ、弾け飛んだ後は変身していたのだが…

あかり「あれ？前よりなんか…」

アンリ「グレートダウンしてないか？」

少し戸惑うあかりと指摘したアンリの言う通り、前は綺麗なピンク色だったのが少し

薄くなり、背中の中の飾りも小さくなって、装飾も減っていた。

ペリドット「あかりちゃんの夢が逃げてしまったからよ」

アンリ「あ、なるほどな」

弱体化した感じかと納得するアンリにペリドットは頷いた後に右手を輝かせる。

ペリドット「追いかけて！ ティンクルティンクル！」

呪文を唱えるとあかりのブーツに羽が生える。

ペリドット「さあ早く！」

あかり「うん！」

アンリ「頑張れよあかり！」

頷いた後にあかりは駆け出し、ハーライトも呪文を唱えて外への入り口を作る。

ハーライト「行きなさい」

あかり「ありがとうございます！」

お礼を述べてからあかりは飛び出して行く。

ハーライト「では、私達も外に出しましょう」

アンリ「ああ」

そう言つて歩き出すハーライトにアンリ達も続く。

アンリ「あ、居たぞ」

外に出ると必死に夢を捕まえようと頑張るあかりが目に入る。

あかり「えい！やあっ！」

のらりくらりとかわわしていく夢がうっすらと透明になりかける。

気付いたあかりはすぐさま近づいて呼びかける。

あかり「待って！消えないで！もう恥ずかしがらないから！」

その言葉と共にあかりの夢はあかりを見続ける。

あかり「ちっぽけでもつまらなくても私の夢なんだもの！」

レオン「今だ！言っちゃえ！自分の夢を！」

ミリア「そうよ！言っちゃえ！」

呼びかけるあかりにレオンとミリアも発破をかける。

顔を向けるあかりにアンリも無言で頷く。

あかり「私の夢は…！テストで百点連発しちゃうの！運動会ではリレーの選手！」

恥かしがりながらもあかりは夢をドンドン言い続ける。

あかり「クラスの人気者になって、皆に勉強を教えるの！お姉ちゃんみたいに

生徒会長にもなるの！」

まだ逃げ続ける夢をみつえながらあかりはまだ止めない。

あかり「それから、お小遣いをいっぱい貰って。それから…売れっ子漫画家になつてなっちゃう！ミュージカルのスターにもなりたいし、それから…」

ルーア「ちよつ、それ全部夢!」

どんだけあるの!?!と驚くルーアもだがレオンとミアも仰天している。

アンリ「(やれやれ、ようやく言えたな…)」

困った様にアンリは笑う中であかりは最後のにもジモジする。

ミア「それみんな叶えたい夢!?!」

レオン「全部!?!」

あかり「そ、そうだよ…ちつぽけだけど、沢山あり過ぎだけど、皆…皆、私の夢なんだから!」

言い切ったあかりに逃げていたあかりの夢は方向転換してあかりの元に向かう。

その後に星と小さい姿から最初に現れた姿に戻る。

アンリ「お、どうやらあかりの夢も安心したみたいだな」

フツと笑う中であかりは手を広げて夢を迎え入れ、大事に抱き締める。

夢はあかりの中へと戻って行き、2人が笑った後にあかりのジュエルチャームが輝いて、服が最初になった時のに戻った。

あかり「この間の姿になれた!」

うわあ…と嬉しそうに笑うあかりにペリドットと変身したアンリが近づく。

アンリ「だから言っただろ? 夢に大きい小さいなんてないって」

ペリドット「この子の言う通り、女の子の夢にちっぽけな夢なんて一つもないの。山の夢があるって素敵な事よ。だって女の子は夢があるから輝くの。夢を叶えようって一生懸命に頑張るから輝くの」

2人の言葉にあかりとルビーは顔を見合わせてうんと頷く。

その後、ハーライト達の前に戻る。

ハーライト「あなたたちはもう夢の大切さを忘れることはなさそうね。あかり、ルビー、あなた達にジュエルストーンを与えましょう」

そう言っただけで両手を翳すとその間に光の玉が現れた後に空へと飛んで行き、虹を作りながらさらに輝くと中から緑色のジュエルストーンが現れる。

ペリドット「夢見る力を持った者に与えられるジュエルストーンね」

アンリ「良かったなあかり」

左手に付いたジュエルストーンにやったーと喜ぶあかりとルビーにアンリは嬉しそうに笑う中でハーライトが呼びかける。

ハーライト「それにアンリ、ルーア：彼女達を見守り、信じたあなた達にもジュエルストーンを与えます」

え？と告げられた事にアンリとルーアが驚いている間にさつきと同じ様にハーライトは手を翳した後にまた光りの玉が出た後にあかり達のと違い、白色のジュエルストー

ンが現れる。

ハーライト「親しい者を信じて見守る者に与えられるジュエルストーンよ」

アンリ「い、良いのか？オレ大した事してないと思うんだが…」

戸惑うアンリにええとハーライトは笑う。

ハーライト「一緒にいるあなたが動かずに見続けたのは彼女が絶対に夢と向き合えると信じていたからこそ、そのジュエルストーンにふさわしいと思いました。ルーアもまたルビーを信じていたことですし」

ルーア「ま、まあね！ライバルだからね！」

頬を赤らめてそっぽ向くルーアにこいつはとアンリは苦笑する。

あかり「良かったねアンリ！」

ルビー「ルーアもやったね！」

抱き着いて自分達以上にはしゃぐあかりとルビーに全くとアンリはくすつと笑う。

レオン「やるじゃないか。学校に来た日にジュエルストーンをゲットか」

ミリア「わ、私だつてすぐゲットしてみせるわ！」

ガーネット「そうよミリア！」

称賛するレオンとやる気を出すミリアにハーライトは笑った後にあかりとアンリ達を見る。

ハーライト「これが第一歩。四人はこれからジュエルストーンをたくさん集めていくでしょう」

3人が温かく見守る中、もう1組、見ている者達がいた。最初にあかり達を見ていた男女であった。

少女「まあこれぐらいはやってもらわないと困るわよね ■■■」

少年「それが目的を達する事に関係してるのか？」

勿論と少女は肯定する。

少女「(だつてそうしないと話が進まないからね)」

内心憎々しげに思いながらあかりとアンリを見る。

少年は我関せずな感じで2人を見続ける。

☆

しばらくしてあかりとアンリは元の世界に帰還した。

その際、あかりは尻もちを付く。

あかり「も、戻ってきた!？」

アンリ『みたいだな。見ろ、時間が全然進んでないだろ』

驚いて周りを見るあかりにそう言いながらほらと止まっている猫と雀を見る様に言う。うと周りの景色が元に戻り、猫と雀も動き出す。

それにあかりは慌てて身を乗り出すと丁度出発する母の車が見えた。

あかり「いつてらっしやーい！」

アンリ『そんじゃああかり、魔法学校に通うのはどうする？』

決まってるよと返してから肩に上ったルビーとルーアを見る。

あかり「ルビー、私魔法学校に通ってみる」

ルビー「あかりちゃん……！」

ばあと笑顔になるルビーにあかりは小さく頷く。

あかり「頑張るよ。ルビーやアンリたちと一緒に！」

アンリ『ああ、そうだな……』

ルーア「私達が先になってやるんだからね」

それぞれ笑い合いながらワイワイ話し合っただけだったのであった。